

インターンとして活動して

中澤美樹

2016年9月から東京事務所でインターンをさせていただいている中澤美樹と申します。私がJFCについて初めて聞いたのは、フィリピン留学中のことでした。私が現在通う国際基督教大学のOGとの食事の途中、彼女がふと口にした「JFC」という言葉がなんとなく耳に残り、後日ネットで調べたところJFCネットワークにたどり着きました。すぐにマリガヤハウスへのインターンを希望しましたが手違いでメールが届かず、帰国してから再度インターンを希望し、今に至ります。

フィリピン人女性の興行ビザによる来日については、Lieba Faierというアメリカの文化人類学者が書いたエスノグラフィー（民族誌/現地調査を通じて得たデータをまとめたもの）「Intimate Encounters: Filipina Women and the Remaking of Rural Japan」を読んだことがあり、なんとなくは知っていました。Faierは来日した女性たちが地方の嫁不足を補う役目を担っていることや、姑らからなんらかの日本の「嫁」像を体現せねばならない圧力があることに触れ、それに立ち向かうフィリピン人たちの姿を描きました。「フィリピン人女性は遅い」とはよく聞きますが、「家族を支えたい」「豊かな生活をしたい」と何かしらの願いを抱えて来日する女性たちには、「やりたいことがない」と戸惑う私の周りには同世代の就活生に欠けた活動力を感じます。

お母さんについては上述の本やフィリピン大学での開発学の授業で知ってはいましたが、自身のアイデンティティのルーツを求めて父親を探している同年代のJFCたちについては聞いたことがありませんでした。私の母は中国系マレーシア人、父は日本人です。幸い、両親揃った家庭で育ちました。父親に見捨てられるというのはどういうことだろう、JFCたちは文化的にどのようなアイデンティティを持っているのだろう、私と重なる部分・重ならない部分はどこだろうかと、自己探求が入り混じった問いを持ってJFCネットワークでのインターンを始めました。

仕事の合間に里枝子さんの話を聞くにつれ、日本に住む幼いJFCの姿は自身の幼い頃と重なると感じることがありました。無論全てのJFCに当てはまることではないでしょうが、日本に馴染めないがために母の言語を拒否したことは恥ずかしながら私にも覚えがあります。日本文化で育った私の話し方や価値観が母と違うために日本人の友達とするような面白い話をして同じ温度で母に理解してもらえず、いつしか会話を諦めるようになってしまったこともあります。日本語や英語といった共通の言語だけでなく、音楽やドラマ、植物や宗教など、どんな文化背景を持っていてもそれについて話し合える共通のコトバを持つことが、母との関係を今の形に築き上げた土台となったと今にしてみると思います。

私が大学で専攻する文化人類学は「その人の目から世界を見る」ことを目指しています。通常、事務所で行う翻訳作業は単調な時もありますが、お母さんがどのような思いや事情を抱えているのか、JFCはどんな世界を見ているのかを想像しながらやってみると眠気も吹っ飛びます。私がJFCネットワークに貢献できることは少ないですが、一人一人に寄り添う形で支援をする親身な姿勢や温かい職場の中で自己探求をするきっかけを与えてくれたJFCネットワークに感謝しています。